2 月 25 日のメッセージ

聖書：ヨハネによる福音書　9：13 – 41

「あなたは、もうその人を見ている」

「出かけるときに変装しますか。」ある芸能関係者のインタビューはこんな言葉で始まっていました。そして、答えは「一切しません」。理由を問われると、「こんなところにいるはずがないと皆思っているから、気づかれることはまずない」とのこと。確かに人は自分の見たいものを見たいようにしか見ません。だから、あり得ないところにいる存在に気づかないのかもしれません。

その視点でこの聖書箇所を見れば、ファリサイ派の人々がどれほど「自分の見たいものしか見ていないか」に気づかされます(「わたしたちは、あの者が罪ある人間だと知っているのだ。』」ヨハネによる福音書 9:24)。

イエスによって目を開かれた人の言葉に耳を傾けようともしません(「ファリサイ派の人々の中には、……『どうして罪のある人間が、こんなしるしを行うことができるだろうか』と言う者もいた。」ヨハネによる福音書9:16)。

それどころか、彼の両親まで呼び出して、この「目が開かれた」という事実を受け入れようとしないのです(「ついに、目が見えるようになった人の両親を呼び出して、尋ねた。『この者はあなたたちの息子で、生まれつき目が見えなかったと言うのか。それが、どうして今は目が見えるのか。』」ヨハネによる福音書 9:18-19)。

一方、この「目が開かれた」人も大変だっただろうと想像します。目が開かれる前、ある意味彼は「楽に」生きていました。目が見えないことで社会の外側に置かれていましたから、その中で起こっていることを気にする必要がありませんでした。また、誰もが彼を罪人として扱って近づこうともしませんでしたから、人間関係に悩まされることも少なかったことでしょう。

しかし、今、彼は目が開かれたことによって渦中の人になりました。目が開かれたことで、見なくて済んだもの、見たくはなかったものまで見なければならなくなりました。

そして同時に、現実を正しく見ることができるようになりました(「主に祈り、『主よ、彼の目を開いて見えるようにしてください』と願った。主が従者の目を開かれたので、彼は火の馬と戦車がエリシャを囲んで山に満ちているのを見た。」列王記下 6:17)。

それゆえ、彼は何度も問われても正しい答えを返していくことができます(「神は罪人の言うことはお聞きにならないと、わたしたちは承知しています。しかし、神をあがめ、その御心を行う人の言うことは、お聞きになります。」ヨハネによる福音書 9:31)。

確かに彼の人生は、以前は暗闇の中にありましたが、今は光の中を歩んでいるのです(「あなたがたは、以前には暗闇でしたが、今は主に結ばれて、光となっています。光の子として歩みなさい。」エフェソの信徒への手紙 5:8)。

だから、彼はもう一度暗闇の中へ戻る道ではなく、神に従う道を選んでいくことになります(「主よ、あなたはわたしの灯を輝かし／神よ、あなたはわたしの闇を照らしてくださる。」詩編 18:29)。今一度、神を信じ、神が遣わされる救い主に従う道を歩みたいと願うのです(「彼は答えて言った。『主よ、その方はどんな人ですか。その方を信じたいのですが。』」ヨハネによる福音書 9:36)。

「あなたは、もうその人を見ている。あなたと話しているのが、その人だ。」(ヨハネによる福音書 9:37)

私たちも今、この礼拝を通して、彼と共にイエスを目の当たりにしています。私たちの望むと望まざるとにかかわらず、私たちの目も今、開かれ、私たちも救い主を目撃しているのです。

この生まれつき目が見えなかった人は、イエスを信じ、光を掲げながら彼の現実へと送り出されていきました。以前の彼と同じように今、闇の中に置かれている人々のところに光を届けるために出て行ったのです。

では、私たちはどんな光をどんな闇の中に届けましょうか。そして、私たちを待っている人はどんな人でしょう。

神は、目撃した私たちにも今、これからどう生きるのかと問われているのです。